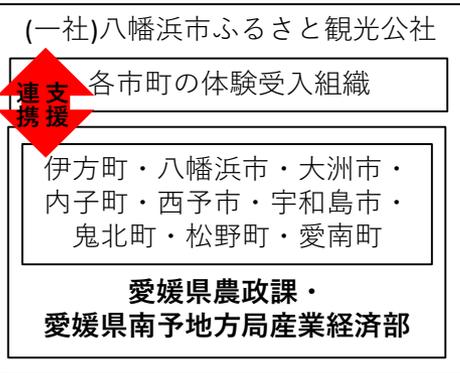
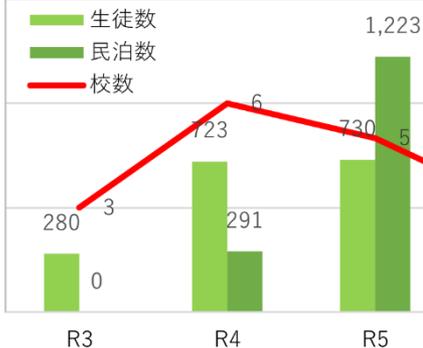


【実施体制】



- 教育旅行受入民家等数：約80
- 体験メニュー数：40
- 受入規模：民泊400名程度、体験メニュー400名程度

【受入実績】 R5.2.15時点



【教育旅行の取組の全体概要】

- 2018年12月 設立
- 2019年2月 地域限定旅行業の登録を受ける。
- 2019年12月 教育旅行向け体験プログラム「ふるさと南予感動体験」の販売を開始
- 2021年～修学旅行受入開始。

- ・2020年から毎年、京阪、関東地区の旅行会社の教育旅行部門へ営業活動を実施。
- ・毎年、全国ほんもの体験ネットワーク会長、藤澤安良氏の研修会、講演会を開催



船釣り体験



藤澤安良氏の研修会

【モデル創生事業目的】

農泊を提供する施設の集積が無い南予地域において、大人数の教育旅行の受入を実現するためには、

- ①受け入れキャパシティ（最大約400人）の確保
  - ②SDGsに対応した魅力的なサービスの開発
- の課題を解決する必要がある。そこで、南予の全9市町における広域な地域間連携により、大人数の農泊の受入体制を構築（昨年度までに構築）するとともに、学校教育においてニーズの高い、体験の中でSDGsの取組を学べる仕組みを教育現場に提案することで、全国各地から多数の教育旅行の誘致を図る。また、この事例を県内他地域に情報発信する。

【事業における取組】

- 先進地視察（令和5年2月18日・19日に実施）
  - ・視察先：徳島県「そのの郷」
  - ・参加者：南予地域の受入組織、民家から14名
  - ・内容：①一般社団法人そのの郷の事業の取り組みについて学ぶ
  - ②民泊・家業体験でSDGs実践プログラムを体験する
  - ③SDGs ワークショップ（意見交換、ディスカッション、発表）

○フィードバック研修会の実施（令和5年3月6日にオンラインで開催）

- ・参加者：南予地域の受入組織事務局
- ・内容：①一般社団法人そのの郷の取り組みについて事業説明
- ②南予地域版SDGs学習の進め方について指導

【活用のための取組】

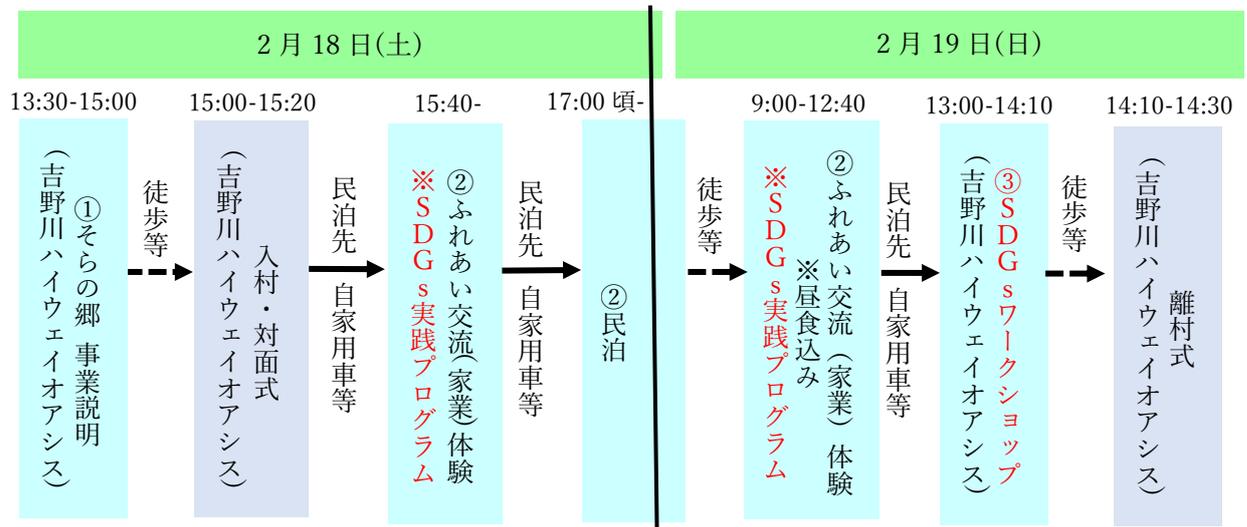
- 受入民家が、実施する体験等の魅力と課題を考え、生徒にわかりやすく伝えるとともに、自ら考える機会を与える。また生徒と受入民家が一堂に集まって話し合う機会を設け、地域や体験におけるSDGsについて考える。これを「南予地域版SDGs学習」として実施していく。
- 2023年5月に修学旅行受入研修会を開催予定
  - 受入組織事務局に対し、フィードバック研修会において、南予地域版SDGs学習の進め方を示した。今後は、2023年にSDGs学習を希望する学校の受入に向けて、受入予定の民家に対してSDGs学習についての研修・指導を継続的に行う。

【今後の取組方針】

- SDGs学習に関しては、それぞれが感じている地域の課題に対して、問題意識を持ってもらい、地域の持つ魅力と課題の両方を生徒に伝えられるように準備をしておくことが各家庭に求められる。
- また、この事例については、積極的に県内他地域へ情報発信する。

## 徳島県「そらの郷」視察研修報告書

- 実施日…令和5年2月18日(土)、2月19日(日)
- 研修会場…吉野川ハイウェイオアシス2階テレワークオフィス(徳島県三好郡)
- 民泊体験先…つるぎ町、東みよし町
- 参加者…14名(南予地域の受入組織スタッフ、受入民家の中から、伊方町3名、八幡浜市2名、内子町1名、西予市野村地区3名、西予市狩江地区4名、愛南町1名)
- スケジュール



### ①2/18「そらの郷」の事業説明、質疑応答

・そらの郷がある「にし阿波」は、徳島県西部で四国の中央に位置する、美馬市、三好市、つるぎ町、東みよし町の2市2町で構成されている。この地域の山の斜面には、人々の営みによって形成された美しい景色が広がっており、にし阿波の約7万人の人口の内、約1万人は山間部で暮らしている。山間部には平らな土地が少ないことから、傾斜地に張り付くように集落が点在しており、場所によって傾斜角が40度にもなる。この山間部のことを、にし阿波では「そら」と呼ばれている。

そうした傾斜地をそのまま畑として利用する「にし阿波の傾斜地農耕システム」は、少量多品目を栽培して自給自足の暮らしを続けている人々によって古くから受け継がれ、2018年には世界農業遺産に認定されている。400年以上にわたり継承されてきた山村景観や食文化、農耕にまつわる伝統行事などのすべてが「傾斜地農耕システム」で、このシステムは、最新の大規模農業の対極にあり、未来に向けても持続可能なものと認められ、食と農の危機

的状況や生態系破壊など、世界が直面する問題解決に繋がるものと評価された。

・一般社団法人そらの郷は「にし阿波」エリアの地域連携 DMO。2007 年に体験型教育旅行の受け入れ組織として設立した「そらの郷山里物語協議会」を母体として、2011 年に「一般社団法人そらの郷」が設立した。徳島県西部の三好市、美馬市、東みよし町、つるぎ町の二市二町の広域連携で観光地域づくりとして、旅行商品の企画、開発、販売、教育旅行、インバウンド誘致に積極的に取り組んでいる。民泊受入民家は地域内で約 180 軒、同時受入は約 600 人が可能。(with コロナの受入れ時は 44 軒、230 名を上限に受入。)

・コロナ前の教育旅行の受入学校数は大体年間 20~25 校で、令和元年度は 25 校 3,319 名を受け入れ。コロナ禍の令和 2 年度の年間受入学校数は、5 校、令和 3 年度は 15 校と受入数は減ったものの、「そらの郷」独自のガイドラインをもとに十分な感染症対策、研修を徹底し、可能な限り受入を続けていた。また、コロナ禍に受入をお休みする民泊家庭を対象とした研修を開催することで情報共有や意見交換を怠らず、民泊家庭のモチベーションを保つ工夫をしているということだった。令和 4 年度の受入団体は 25 校に回復、令和 5 年度は過去最高 32 校、約 6000 名の予約が入っているということだった。

・「そらの郷」の家業体験プログラムは急傾斜地での伝統農法での農作業、郷土料理作りが中心。民泊時の共同調理メニューは季節の野菜を中心とした一汁三菜で、郷土料理を必ず一品は入れるようにしているということだった。

・質疑応答

(参加者からの質問 1) 受入民家はどうすれば増えるのか？

(回答) 実際に受入をした民家からの紹介が多い。最近は移住者にも積極的に声掛けをしている。

(参加者からの質問 2) 民泊の食事で「郷土料理」が推奨されているが、移住者にとって郷土料理の提供が難しく感じる。また、昔ながらの大家族の家というわけではないので、布団や食器の準備にも苦労した。

(回答) 「そらの郷」では郷土料理作りの研修を実施している。他にも体験の進め方の研修なども行っている。設備に関しては、市の補助金を使って各家庭の設備の不足を解消した。



「そらの郷」事業説明



入村式

## ②2/18 - 2/19 ふれあい交流(家業)体験

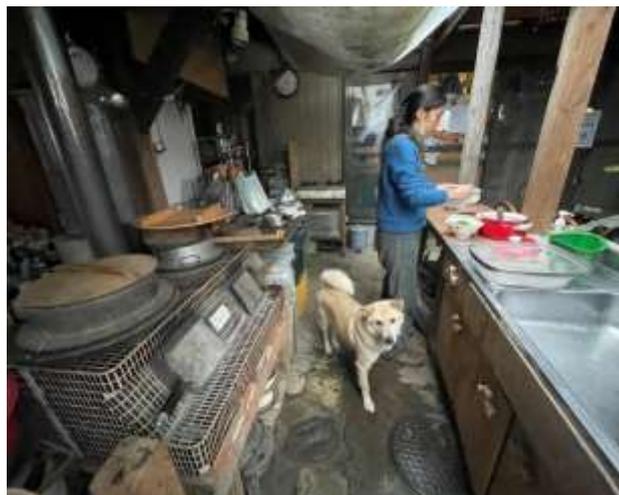
今回、4班に分かれて民泊体験を行った。民家によって体験内容は異なる。

観光公社・山下が訪れた木下正雄さん宅では、野鳥の餌やり体験、そば打ち体験、こんにゃく作り体験を行った。今回は天候が悪かったので、家の中でできる体験が主だったが、畑仕事や狩猟罫の見回りなどをする場合もあるということだった。

木下さん宅の取り組みは獣害対策のための狩猟と「地産地消」を意識した食事。課題と感じていることは集落に若い人が少ないということ。民泊をもっと広めて町を活性化したいという思いがあり、教育旅行の民泊にも積極的に取り組んでいるとのことだった。木下さん宅の民泊では、自然や野鳥とのふれあい、食事作りや会話を通して、地域の魅力や課題について考えることができた。



竹細工 (岩野宅)



釜土炊飯 (上田宅)



そば作り（木下宅）



食事風景（国金宅）

### ③2/19 SDGs ワークショップ

「そらの郷」で実際に SDGs のワークショップをする時の流れを今回の視察研修バージョンで行った。まず、民泊班ごとに分かれて、民泊家庭の方にも話し合いに入ってもらった。さらに、「そらの郷」スタッフが各班に 1 名ずつ進行役として参加するという形で進めた。



ワークショップの様子

話し合いのテーマは「1、徳島の印象、来るまでのイメージ」、「2、体験の感想、民泊体験から学んだこと」、「3、自分の町に帰って活かしたいこと」の3つで、テーマごとに10分程度ずつ意見交換の時間を設けた。最後に話し合った内容をまとめて、班の代表1名ずつが発表した。テーマ1、2で民泊体験を振り返り、「そらの郷」の取り組みと自分の地域、各家庭の取り組みとを比較してそれぞれが感じ、学んだことをまとめる。そして、テーマ3でそれぞれの民泊体験で学んだことを各地域、家庭でどのように活かせるかを考える、という流れで話し合いを進めた。



離村式



集合写真

### ●「その郷」のSDGs学習の進め方について

家業体験、民泊体験で持続可能な伝統農法を体験し、厳しい自然環境での暮らしの知恵を学ぶ。そして、家業体験や共同調理、だんらんによる民泊家庭との交流を経て、最後にフィールドワークやワークショップ、ディスカッションを行う。それらの場には受入家庭にも入ってもらい、地域の魅力や課題について一緒に考え、さらにその課題の解決方法を生徒に考えてもらうという形で学習を進める。

時には修学旅行生と地元の高校生とでディスカッションする場を設けたり、「その郷」スタッフが修学旅行の事前学習や事後学習のお手伝いをしたりして、学校側の希望に合わせて学習をより深めるプログラムに作り上げるということだった。

この学習で生徒は、SDGsを「自分ごと化」とするとともに、今後の自己の在り方、生き方、キャリア形成の方向性について深く考えることができる。そして、受入れ地域にとっては新しい視点から地域の課題に向き合うことができる。

### ●所感

愛媛県南予地域では民泊の受入経験がまだ少なく、民泊自体、今回の視察で初めて体験するという参加者が多かった。そのため、先進地での民泊体験、教育旅行の受入実態や研修方法を知ることは受入組織、受入家庭にとって、非常に有意義な経験となった。また、今回の民泊体験の交流を経て、受入家庭同士で昨年実施した修学旅行の民泊の成功体験や不安点を共有できた。視察研修（民泊体験、ワークショップ）では、質疑応答や意見交換が盛んに行われ、経験豊富な「その郷」の民家からの話を聞くことで、自然のままの自分たちの暮らしを生徒に体験してもらうことの価値について再認識できた。これらのことは、各受入家庭が今後も民泊の受入を続けていく自信になり、今まで交流の少なかった南予地域の受入家庭同士の絆が深まることにも繋がった。

SDGs学習に関しては難しく考えすぎず、それぞれが暮らしの中で感じている地域の課題に対して、小さなことや何気ないことでもいいので問題意識を持っておくことが重要だと学んだ。今後は、生徒に民泊体験を通して地域の持つ魅力と課題の両方を伝えられるように

準備をしておくことが受入家庭に求められる。

また、SDGs 学習にハードルの高さを感じる受入民家は多くいると思うので、5月に予定している修学旅行受入研修会では今回の視察参加者、フィードバック研修会参加者が中心となって、公社の示す南予地域版の SDGs 学習の進め方を浸透させていく必要がある。

## 「フィードバック研修会」報告書

○実施日…令和5年3月6日(月)※オンラインにて開催

○参加者…受入組織事務局(伊方町、大洲市、内子町、西予市野村地区、西予市狩江地区、松野町、愛南町)※伊方町と松野町は都合により欠席

○スケジュール

13:30~14:00 「その郷」の取り組みについて

14:00~14:15 SDGs学習の進め方について

14:15~14:30 質疑応答

○「その郷」の取り組みについて

その郷の事業説明資料をもとに説明。※「報告書(視察研修)」参照

○SDGs学習の進め方について

令和5・6年度で修学旅行の中に、SDGs学習を取り入れることを希望している学校が2校ある。令和5年度6月に受入予定の1校を具体的な事例としてあげ、SDGs学習の進め方を提示した。



令和4年度11月に課題解決型の修学旅行で民泊を受入れたが、その時は課題解決型学習と民泊とが切り離された形で学習が進められた。(地域の課題について、生徒だけで事前学習をし、フィールドワークをして事後学習を行うというもの)民泊自体の満足度が高かった分、民泊と地域の課題解決とを切り離して学習することがもったいないと感じ、よりよい課題解決型の修学旅行の形があるのではないかと感じた。

そこで、生徒にとって現実的かつ達成感の得られる課題解決型の学習を提供し、地域にとってはより切実な課題解決に繋げるために、「その郷」でも実践されているSDGs学習の部分に受入家庭にも入ってもらおうという形の学習方法を提示した。



また、この学校の要望が、事前・事後学習は行わずに修学旅行でSDGs学習を完結させたいというもので、家業体験の交流の中で、ある程度地域の課題について民家と生徒とでしっかりと話し合い、共有してから離村式前の「SDGs学習成果発表」に臨む必要がある。

○質疑応答、感想

(野村地区事務局／質問) 受入家庭の仲間をどんどん増やしたいと思っている。高齢の方が多いため、SDGs学習というハードルが上がってしまうのかなと思った。

(公社／回答) 課題を共有して一緒に取り組むという感じで、そこまで難しく考えなくて大丈夫だということを知ってもらいたい。そのためにも一度、修学旅行受入研修会に来ていただきたい。また、実際に令和5年度の修学旅行でのSDGs学習成果発表の様子を見てもらうのもいいかもしれない。

(野村地区事務局／質問) SDGs学習は毎回民泊に付随するものなのか。

(公社／回答) 学校から要望があった時だけなので、毎回ではない。

(野村地区事務局／質問) SDGs学習部分の料金はいくらか。

(公社／回答) 現在設定されている家業体験の金額と同じ。

(狩江地区事務局／感想) 受け入れしてくれる農家さんたちはおそらく「SDGsとは？」という感じなので、5月の修学旅行受入研修会で分かりやすく説明していただき、民家さんに

入ってもらう時のディスカッションの進め方などについても丁寧に教えてもらう必要がある。

(大洲市事務局／感想) SDGs に拒否反応を示す民家さんもいるかもしれないので、そこまで難しいことをしようとしているわけではない、とわかってもらえるように民家さんと一緒に勉強しながら進めていきたいと思う。

(野村地区事務局／感想) 「そらの郷」の民泊体験から、自然や田舎のすばらしさを改めて実感した。ありのままの自分たちの暮らしを見てもらうだけで生徒が喜ぶという意味がわかった。

(愛南町地区事務局／感想) 今回の「そらの郷」の民泊体験で、受入家庭に家族のように温かく迎えてもらい、心温まる田舎体験を体験できた。自分の地区でも「そらの郷」のような心温まる体験メニューの開発をしたいと思った。